

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2016年12月25日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信50号



夕暮れの陽に映える紅葉と茅ポッチ(6頁参照)

- 9月～12月の活動報告(事務局)1
- 定例活動2016⑤.....2
「木馬道再生 & 第三回車座講座」
◆開催報告(米山正寛・草野洋)
- 定例活動2016⑥.....4
「茅刈り・茅ポッチづくり & 第四回車座講座」
◆開催報告(草野洋)
- 定例活動2016⑦.....5
「茅ポッチ運びだしと山の口終い」
◆開催報告(草野洋)
◇参加者感想(成田早苗)
- 全国草原再生サミット・シンポジウム.....7
◆参加報告(西村大志)
- 麗澤中学校「奥利根・水源の森林フィールドワーク」.....8
◆開催報告(草野洋)
- 第一回東京楽習会「千年の森をつくる生き方」.....9
◆開催報告(稲貴夫)
- 藤原現地報告(北山郁人).....10
- 協賛団体紹介 第四回「東洋プロセス」(稲貴夫)11
- 野守のつぶやき(清水英毅)12

【9月】

- 12日、「茅風」49号発行。
- 24日、25日、一般参加プログラム「ミズナラ林の若返り伐採・木馬道再生」実施。15名参加。首都圏勢に加え沼田や魚沼など近隣から5名の参加あり。木馬道は10メートルの目標を超える50メートルを敷設し、試運転も実施。交流会では、「車座講座」として元猟師の方から熊うちなどのお話を伺う。また、二日目早朝に県道の側溝掃除を実施(本年度3回目)。(2頁)
- 15日付で、上ノ原「入会の森」を環境省「つなげよう支えよう森里川海」アクションの対象として応募、提出。

【10月】

- 15～17日、兵庫県上山高原にて第11回全国草原再生サミット・シンポジウムが開催され、幹事2名が参加。西村幹事が第2分科会「地域の草原を維持する仕組みづくり」にてコメンテーターとして話題提供の後、青水の理念や活動、担い手確保の取組や若い世代としての意見を発表。(7頁)
- 26～28日、麗澤フィールドワークにインストラクターとして参加。生徒139名に、フィールドや周辺をガイドするとともに茅刈や、茅を使った工作など指導。

- 29日、30日、一般参加歓迎プログラム「錦秋の茅場で茅刈・ポッチづくり」実施。首都圏からの22人に地元勢を加え、総勢32名で100ポッチ弱の成果。(4頁)

車座講座では、みなかみのエコパーク構想について、みなかみ町エコパーク推進室小池俊弘氏より熱い思いをお聞かせいただく。また、上ノ原の空撮動画や地元の写真家夏目氏になる地元紹介ビデオを観賞。

【11月】

- 3日、県による上ノ原林道工事終了。便利になった反面、マナーの悪い人の立ち入り懸念あり。
- 12日、13日、一般参加歓迎プログラム「茅ポッチ運びだしと山の口終い」実施。首都圏13名に地元を加え総勢19名で約4000ポッチ運びだし。(5頁)

【12月】

- 8日、セブン-イレブン記念財団の季刊誌『みどりの風』2016年冬号の「ただいま活動中」に、青水の活動が見開き2ページで紹介される。
- 11日、第1回東京楽習会実施。「千年の森をつくる生き方」と題して、えひめ千年の森をつくる会会長鶴見氏の講演を拝聴。(9頁)

(以上)

■定例活動⑤「木馬道再生」

約40年ぶりに木馬が走った！

ミズナラ林に歓喜の聲響く 米山正寛

森林塾青水が活動する上ノ原のミズナラ林には、木馬道(きんまみち)と呼ばれる林内の散策路があります。薪炭林として使われていた昭和の高度経済成長期前まで、この道を使って、実際に木馬(きんま)で木材を運んでいたから、そんな名前が付いているのです。

木馬道で材を運ぶには、まず緩い傾斜の坂道に等間隔で盤木(ばんぎ)という木を敷きます。鉄道の線路に枕木だけが並んでいる様子を思い浮かべると、近いイメージでしょう。その上を走るのが、木製のそりである木馬です。ここに丸太を載せて、下り坂を自重で滑り下ろして運ぶわけです。もちろん前に立つ引き手が、状況次第で棒で舵取りをしたりブレーキをかける必要がありますし、木馬が滑りやすいように盤木には菜種油を塗りながら進むなどの工夫もこらされていました。木馬は、山の多い日本独自の運材方法として、各地に広がっていたようですが、トラック輸送などと交代する形で姿を消していきました。

9月の定例活動では、その木馬による運材を、みなかみ町藤原地区の古老の一人、阿部惣一郎さんの指導の下に再現することができました。もちろん、そんなことがすぐに実現できるとは、青水の誰もが思っていませんでした。直前の幹事会でも、「目標は10m」と話し合い、「将来は木馬を作って走らせたい」という願望が意見として出ただけだったのです。

ところが24日に上ノ原へ行くと、惣一郎さんはかつて自分が使っていた木馬を修理復元して、待っていてくれました。荷物として丸太を載せる時は、木口同士をかすがいで留め、全体をワイヤーロープで縛って、木馬に固定します。説明用に、そんな見本も用意されているという熱のこもりようでした。かつては木馬に、人の背丈ほども丸太を積み上げたそうですから、ほぼ1m³(昔は3~4石は載せた(惣一郎さん談):重さで700~800kg)の材を一度に運んだようです。それだけ大量の材を載せるのは無理にしても、この木馬を見て「再生させた木馬道に、この木馬を走らせよう」という思いが、参加者15人の心に湧き起こってきました。

作業としてまず手掛けたのは、周囲のミズナラの木を



復元された木馬と丸太の見本。後ろは炭焼き窯

伐採して玉切りし、長さ約1.2mの盤木を用意することと、それを敷く道を、唐鍬などを使って平らにらすことでした。

そして、玉切りした丸太を樹皮付きのまま少し地面に埋め込み、周囲を踏み固めて、木馬道を少しずつ延ばしていきました。

この時、惣一郎さんは「丸太の元(もと、根元に近い方)を道の谷側にして置くのが基本だ」と、何度も繰り返して話されました。

丸太の元は、末(うら、梢に近い方)よりも数cm太



盤木の敷き方を説明する阿部惣一郎さん

いものです。もしも木馬が尻を振るように滑っても、盤木の谷側が少し高くなっていることで、木馬が木馬道から逸脱して谷に落ちるのを防ぐ効果が期待できるというわけです。

この日の空は雲が垂れ込め、上ノ原も霧に覆われていて、いつ雨が降り出すかと少し心配でした。しかし、おかげで暑すぎることもなく作業は比較的順調に進み、午後からの2時間余りで、目標を上回る約20mの木馬道の再生を果たし、雨の強まる前に作業を終えました。

25日は、参加者が5人減って10人になりました。そ



木馬道再生のための地ならし



出来上がった木馬道50m

れども、天候が回復して晴れ間ののぞく空の下、太すぎた一部の盤木を割って敷き直しつつ、さらに木馬道を延長させる作業を朝の9時から2時間余り続けました。2日目となって、だいぶ要領もつかめてきたためか、再生した木馬

道はなんと約50mに達しました。

すでに、修復復元された木馬は、朝一番で木馬道の最上部に運び上げてありました。そこに伐ったミズナラの丸太を載せ、前日に教わったようにかすがいやワイヤーロープを使って、荷崩れしないように縛りました。

さあ、初めての試走です。引き手に選ばれたのは、一番の力持ちである北山郁人塾頭です。草野洋塾長をはじめとする他の参加者は押し手として、周りを取り囲みま



木馬道を滑る木馬。歓喜の声が林内に響いた

す。みんなが満身の力をかけた木馬は、下り坂をゆっくりと滑り出しました。「動く、動く。」ミズナラ林の中に参加者の歓喜の声がこだましました。木馬は、人が歩くよりも速いくらいの速度で、約40mの木馬道を無事に滑り降り一同からおもわず拍手が出ました。予想以上の出来栄です。熱心に指導してくださった惣一郎さんが、「約40年ぶりに木馬が動いた」と笑顔で話してくれたのが、私たち参加者には最高の贈り物でした。

このミズナラ林の入り口には、森林塾青水と協力関係にあるNPO法人奥利根水源ネットワークが整備した炭焼き窯があります。木馬道をそこまで再生させれば、将来には炭焼き用の材の運搬に使えるかもしれません。この日、「数年かけて、あそこまで延ばしていこう」（草野塾長）という新しい目標が生まれました。



滑走を終えて鎮座する木馬と集合写真

森林塾青水では昨年からの活動のあと、車座講座として、藤原の自然や暮らしに詳しい地元の方や草原・自然・植物に専門的な知識を持った会員からお話を聞く機会を設けております。昨年は6回、今年も2回実施しましたが皆さんに好評でした。

今年の第3回は、9月24日、「木馬道再生」作業の後、長年、藤原で猟に携わってこられた中島續さんをお願いしました。

中島さんは、須田貝集落にお住まいで、昭和19年生まれの御年72歳、藤原では若手になるのですが青年のころから猟をやっておられて動物の習性などにお詳しい方です。また、現在は畑で野菜など作っておられ續さんの野菜はおいしいと評判です。



この夜の宿は、民宿「並木山荘」。奇しくも中

親方が過ごした部屋で「親方は厳しかったがいろいろなことを教わった」

島さんはこの宿の先代である故吉野秀市さんの一番弟子とのこと。微笑む親方の写真の下での車座講座は、いつものように草野によるインタビュー形式で、藤原の猟師2代に渡る貴重な話を聞くことができました。

主な内容は、中島さんの経歴に続いて、猟に携わったきっかけやお師匠さんのこと、獲物や季節、猟をする地域、具体的な猟のやり方、とった獲物の処分方法、そして最近のクマ出没の話題やクマに出会った場合の対処法、そして須田貝集落に関することまで多岐にわたり、その詳細は伊賀さんに「聞き書き小冊子」にまとめていただきますが、穴熊を撃つ方法、藤原のイノシシは「イノブタ」であるらしいこと、シカも本来の二ホンシカではない、子連れの熊には近づくな、新潟の猟師のことなどが印象に残りました。

人柄から醸し出る人懐っこさ、藤原弁でひょうひょうと話される中島さん、動物の気持ちがわかるような気がする魅力的な人でした。



■定例活動⑥

「錦秋の茅場で茅刈り・ポッチづくり」

草野 洋

今年の奥利根の紅葉は今一つでしたが10月29、30日に今年も錦秋の奥利根上ノ原茅場で茅刈りが行われました。



マユミのこの赤は自然界しか作れない

町から澤浦商工観光課長をはじめ3名、地元から古老衆を含め3名、町田工業から2名の総勢32名が茅場に鎌音を響かせました。

天候はうす曇り少し肌寒いような作業日和。始まりの会のあと茅刈を初めて経験する参加者が6人ほどいたため町田工業のお二人に実地指導をお願いし、早速、



初日にはきれいな虹が



日帰りを含めて首都圏からの参加者22名に、遠くから日光茅ポッチの会の飯村さん

と湯澤さん、みなかみ

と湯澤さん、みなかみ町から澤浦商工観光課長をはじめ3名、地元から古老衆を含め3名、町田工業から2名の総勢32名が茅場に鎌音を響かせました。

今年季節がおくれ、夏の降雨不足、秋の長雨と天候不順の影響もあってススキの成長は例年の8割程度、雑草

が目立ち、少し青さが残っていますがその分結束がしやすくなっています。それでも春に野焼した部分は野焼効果もあって品質の良い屋根茅が採れそうな状態です。

1週間ほど前から刈った古老衆のポッチと前々日には麗澤の子供たちが作ったお手本のポッチが立っています。

やはり初体験組は最初、難儀したようですが、鎌の引き方、束のつかみ方、腰の入れ方などの要領を教えてもらい、いすぐに自分のペースで刈り始めました。

今年は茅束の品質を上げる狙いをひそかに持っていました。ポイントは束の中から雑草や穂がない細いススキを除き、穂のあるススキをいかに多くするかです。そのため、成長の良い茅に向かってトラ刈り状に刈進みます。

また、技量が伴う伝統的な縛りにこだわらず、ヒモを使って能率を上げを試みました。

1日目にはみなかみ茶道会のご婦人方が駆けつけて下さり、野点で疲れをいやすサービスをいただきました。ほどよい汗をかいた後のお抹茶、大変おいしく、周りは紅葉という絶好の雰囲気の中で味わいました。この方々は、合間にオカリナで里の秋などの唱歌を演奏してくださいました。

また、初めての試みとして岐阜大の津田先生に「燻製装置」



みなかみ茶道会の皆様



燻製装置

を手作りしていただき、茅刈が終わるころには鳥のささ身、かまぼこ、紅鮭などの燻製が出来上がり、おいしくいただきました。これも毎年のプログラムにしましょう。

皆さんの茅刈の様子を増井さんと夏目さんがドローンで撮影してくれました。総会の時に上映しましょう。

2日間で刈ったポッチ数は暫定で88ポッチ。実際はもう少しあるでしょう。茅出しの際に検数します。この茅ポッチは重要文化建物の屋根茅に生まれ変わります。

第四回車座講座も開催

この日の宿は食事おいしい「とんち」。腹いっぱいのごちそうの後には車座講座です。

今夜の講師は町役場の総合戦略課エコパーク推進室エコパーク推進グループGL小池俊弘さんに「みなかみ町の魅力とエコパーク構想」として国内推薦が決定し、ユネスコで審査待ち中のエコパーク構想についてプレゼンしてもらいました。

パワーポイントを駆使して説明される小池さんにはエコパーク登録にかける並々な熱意と情熱があふれていました。エコパーク申請・登録を契機に合併後のみなかみ町民の心を一つにしたい、役場行政の意識も変



小池さんの情熱あふれるプレゼン

えて町の発展につなげたいとの強い想いが伝わってきました。参加者からは、来年6月頃の登録決定を切に願うとともに、登録後の町民の暮らしが真によくな

るような施策が大事なので頑張ってもらいたいなどのエールが送られていました。青水としても協力を惜しみません。休日夜分にも拘らず遠方まで出向きプレゼンしていただいた小池さんに心から感謝申し上げます。

車座講座の後は、恒例の交流会、日光茅ポッチの会や町田さんの差し入れの日本酒をおいしくいただきながらの話は盛り上がりました。

翌日は希望者12名ほどで、晩秋の奥利根水源の森林(国有林)へ。現地では夜明けの中のブナ林が見られるちょうど時間になるように早朝5時半の出発です。

往きの暗闇の中では紅葉も見えませんでしたでしたが着いたときのまだ葉を残している朝もやのブナ林と帰りの朝日の中の照葉峡の紅葉は見事でした。

茅刈は村の古老衆が11月10日ごろまで刈り続け、12日、13日と、からっ風で乾燥させたポッチを運び出し、町田工業さんに買い取っていただき、ポッチに第2の芽生を与えます。

野焼きと茅刈は茅場維持にとっても重要な作業です。茅場をはじめ人工林や棚田など人々の暮らしの中で作り上げた半自然(二次)は、人の手が離れると荒廃します。

この美しい風景をいつまでも保ち日本文化の維持に不可欠な屋根茅を供給し続けるために今後も皆様のご協力をお願い



します。

祈る登録！！

このような人と自然のかかわりの中で作られて維持継続していく風景こそエコパークの本質ではないでしょうか。

今年刈ったポッチは狙い通りクオリティーが良いものになりましたので1年間はストックし買い取ってもらった段取りを付けました。茅刈終了後、地域イベントのお散歩マルシェの拠点で藤原の農産物を購入しましたが茅束の代金を参加者に還元してかねてより考えていた「地域通貨“ポッチ”」が実現できればいいですね。



■定例活動⑤

茅ポッチ運び出しと山の口終い

草野 洋

今年の茅出しは天候に恵まれた。用心して厚着をしてきたのが完全に裏切られ、2日間とも日本晴れ・小春日和。藤原集落内の紅葉も晩秋のブラウンの強い独特の色合いの中にイタヤカエデやハウチワカエデの色が鮮やか。秋の陽ざしに浮かぶ紅葉や夕暮れの紅葉は、うっとりするほどでした。

そんな中、青水の活動の中で一番の過酷な作業に首都圏から13名が参加。地元茅刈衆、移住組、町田工業衆を合わせて総勢19名での作業となった。林道手小屋線の改良もあってポッチを曳く距離はやや短くなっている。

初めに縛り紐を用意して縛り方の方法をおさらいする。

ポッチを倒す方に紐を置き、倒して人間でいえば膝の下あたりで縛り、一ポッチあるいは二ポッチの穂をもって車道まで曳きずり出すのが一連の行程、この作業は



倒して、縛って



「これでもか」時には押さえつけて縛りあげる。

れ陽に当たる紅葉の美しさが入ったかどうか。

話は変わるが、6月頃から十郎太ノ沢の管からの水が



この景色、自然の造形は神様が・・・

水の復活である。ご不便をおかけしました。

十郎太の泉で、麗澤学園の生徒たちに「森林(土壌)は、降った雨をゆっくりと時間をかけて浸透させる。データによれば1日に1~2m、今、ここに出ている水は3km



十郎太銘水復活！

きついがちょっと色っぽい(なぜだかは想像にお任せする)。

下りは良いが上りの傾斜は相当きつい。朝に降った雨で初日は重かったボッチも次第に乾き軽くなり助かった。

初日に気合を入れて全体の約9割を終了させたので、終わりの笛が鳴るころは心地よい疲れを通り越した疲労困ぱいの目に夕暮

れ陽に当たる紅葉の美しさが入ったかどうか。話は変わるが、6月頃から十郎太ノ沢の管からの水が出なくなっていたが、茅刈の時、すぐ上のマスのふたを開けたら管を植物の根がふさいでいたので除去したら再び勢いよく出るようになった。銘

ことになる」と感想を述べていた生徒がいた。なるほど！！「子供たちは未来からの留学生」、未来志向とはこのようなことなのだろうと若い柔軟な発想に感心したものである。「それまで、山や泉があって・・・いや未来からの留学生が永遠に飲めるようにしなければならないな」と滔々とする水を見ながら感じた。

この日の宿は洋風ペンション「パル」、塾が初めて使うベッドの部屋である。ワインと洋食とすき焼きで空腹を満たし疲れをいやす。今夜は車座講座がお休み、交流会はスーパームーン十二夜の月も微笑むような楽しい盛り上がり。

2日目は、茅刈の時に見損ねた湯の小屋の「大ナラ」を見に行くことになり6時起床。

大ナラは県道から約20分、里道「大芦・湯の小屋線」沿いにあり、周囲はミズナラ、ブナの2次林、大人4人が手を回すような大きさである。途中、笠ヶ岳も見える。この里道は少し傾斜がきついが比較的広く歩きやすい。上ノ原にも通じているようだ。また一つタカラを見つけた。



大ナラ

昨日頑張ったおかげで、2日目の茅出しは1時間半で終了。最後のところは下りだが車道までの距離があり、上りがつらいラストスパートとなった。

積雪の被害に備えて看板をはずす作業をしていたら、一番森に近いところの看板がクマにかじられていた。自分の縄張りに勝手に立てるなどの警告か。生物多様性が豊富な証拠である。

「山之口終い」を稲さんの進行で行う、十二様に「素晴

らしい茅を収穫できたこと」「美しい茅場風景を作ってくださったこと」「一年が息災であったこと」に感謝し



曳き作業下りは良いが帰りはハアハア

てみんなで
拍手を打ち、
お神酒をい
ただいた。

その後、
炭窯作業を
惣一郎さん
の説明で聞
き、昼食は
晩秋の茅場
で「カレー」である。これも初めての経験だったがおいしくお替わりしてしまった。

皆様の奮闘でポッチが第二の茅生を送ることができます。重労働ほんとお疲れ様でした。



ドキドキ茅出し一年生

成田 早苗

着いたところは一面の茅の原、美しい紅葉の山々・そして青い空、白い雲。野辺に湧き出ずる岩清水。ワーオ・思わず何のために来たのかを忘れそうになりました。又、朝の山道の落葉の絨毯の柔らかさに、遠い日の故郷の優しさがよみがえるのでした。

今回、西山さんのお誘いで初めて参加させて頂きました。ボランティアと言うからには役に立たなければならぬ・足手まといにだけはならないように・という心構えだけは一人前でした。しかし一日目の私はまるで新入社員、茅の束の扱いに手こずっておりました。

さて二日目、地元のベテラン先生からアドバイスを受けたこともあり、コツがつかめてきたのでした。先ず、足と膝の直角を利用して茅を引き寄せ、膝で押しながら紐をエイッ・エイッ・と締める。そこでヨイショと束をまたぎ両膝でギュッギュと寄せると楽々に、更に引き締まる。これというのも、姫心をかなぐり捨てて挑んだからこそ得られた極意かな？(笑) 運ぶ方は、二束同時に運べる男性に任せた方が能率的だということもわかりました。これってやはり姫心？

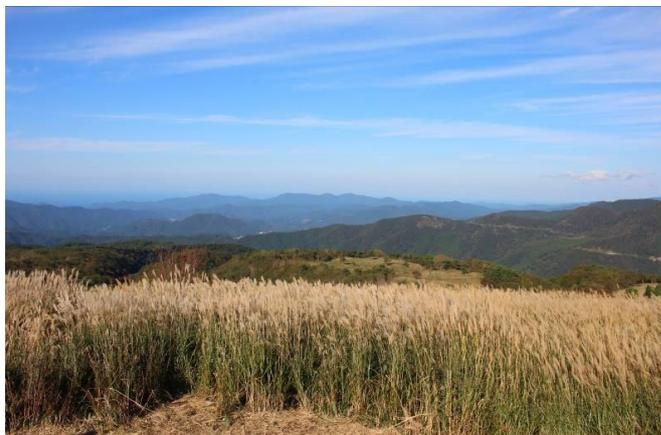
ちなみに、この身は 72 才。イマルちゃんじゃないけれど、イキてるだけでマル儲け・と感じる秋の日でした。皆様そして民宿パルの中村雅俊さん、いろいろとお世話様になりました。ありがとうございました。



■第 11 回全国草原サミット・シンポジウム 於・兵庫県新温泉町 参加報告

西村大志

10月15日～17日に兵庫県の新温泉町で開催された第11回全国草原サミット・シンポジウムに参加してきました。



上山高原展望台からの風景

15日は地元の草原、上山高原の現地見学会でした。上山高原も上ノ原と同じく一度は放置されていた草原で、広葉樹林やササ原になっていたところをすべて人力で切り倒し、今では37haの草原が再生されていました。花こそあまり見られなかったですが、一面にススキの穂が広がる光景はとてきれいでした。また、丘の上に手作り感のある展望台が設置されており、そこから360度のパノラマが見渡せたのが印象的で、草原の魅力を引き出す施設だと思いました。

16日はシンポジウムで、草原に関する基調講演や実践報告、保全や再生に向けての課題を議論する分科会、全体会などが行われました。印象的だったのは芸北茅プロジェクトの実践報告で、芸北中学校の生徒が学校や地域での教育活動を通して茅などの地域資源の利用を体験し、地域の経済活動に参加し、さらにそれを広めていくための仕組みづくりや広報活動に関わっているということ、生徒たちが自ら発表していて、会場の注目を集めていました。

午後に行われた分科会では、「地域の草原を維持する仕組みづくり」をテーマにした第2分科会で、地元で活動されている4団体の話題提供のあと、コメンテーターとして森林塾青水の活動の概要や担い手の確保について考えていることなどを少し話してきました。

各団体それぞれの課題があり、共通解を見出すのは難しい話題ですが、意外だったのは、当日の議論の中ではおおむねどの団体も都市部(遠距離)からの参加は比較的あるけれど地元の参加を得ることに苦労しているということでした。そのあとの全体会では、他の3つの分科会(ジオパーク活動と教育と草原、草資源の農業・畜産への利用方法について、かやぶき文化の継承のための茅場の保全・再生)の結果と合わせて、議論のとりまとめが行われました。



17日は草原に関わる自治体の首長が集まる草原サミットが行われ、前日のシンポジウムの結果を踏まえて、上山高原宣言が合意されました。この中には、草原再生に向けた取り組みの支援や教育、文化、観光、産業振興等への自然資源の利用といったことのほか、草原の大切さのアピールのために全国草原100選を選定していくこと、そして、全国の草原を有する自治体が情報を共有し、新たな保全対策に向けて連携して行動していくために「全国草原自治体ネットワーク」を設立することが盛り込まれています。

全国草原サミット・シンポジウムで共有した情報や草原に関わる方々とのつながりを、上ノ原の草原、さらには全国の草原の保全、再生の取り組みに活かしていきたいです。

■麗澤中学校一年生
奥利根水源の森林フィールドワーク
草野 洋

中学3年間の学年毎に「自分(ゆめ)プロジェクト」を設け「未来を創造する知恵とたくましさ」を身に着けるオリジナルプロジェクトを展開し、「仁草木に及ぶ」(慈しみの心を、人間はもとより植物にも及ぼす)を実践している廣池学園麗澤中学校の一年生139人が上ノ原や藤原で10月26日から28日までの2泊3日のフィールドワーク(以下FW)が行われ青水が手伝いました。

5月のキャンパスでの樹木観察会以来5か月ぶりの心も体も確実に成長した生徒たちとの再会はやはりうれしいものです。



一年生のプロジェクトテーマは「自分と自然」で「自然から恩恵を感じる」ことを目標にしています。この目標を達成するために今年からFWの時期とプログラム内容を変えました。

例年は7月の夏休み前に実施していましたが暑い盛りと梅雨末期は天候が不順なこともあり、生徒たちの安全・健康を考慮して錦秋の10月に。ロング森林散策を中心としたプログラムは時期的に可能な茅刈体験をメインにショート森林散策、茅編みクラフト、集落内の神社、古民家見学としました。

刃物である鎌を使っての茅刈体験、安全性を心配しましたが子供たちはほとんど初体験にも拘らず刃物を持った時のルールも守り真剣に取り組んでいました。

最初の村の古老達(おじいさん・ひい

おじいさん)の刈り方や伝統的縛りの指導も新鮮な感覚だったようでグループで1ボッチの予定が2、3ボッチ作ったグループもいたようです。

28日のまとめである生徒から聞いたところ、夏休みに毎年おじいちゃんと草刈りをしている生徒もいた様でそれほど心配することではなかったようですが、無事に終わってホッとしています。

私は翌日彼らの作ったボッチを見に行きましたが、大人が作ったボッチに負けないくらい立派なたくさんのボッチがキチンと林立している風景に感激してしまいました。

木馬道森林散策は茅場を出発し「ははその泉」～「木馬道」～「炭窯」までの説明を入れて約1時間コース、ポイントは5か所、①茅場(二次(半自然)草原の成り立ち、再生維持の方法、トチノキの冬芽がネバネバするわけ、②「ははその泉」のほとりで森林と水源涵養の話、③伐採跡地では「伐ることは環境破壊か(林業)」の話、カエデの種類、④キハダを例に人間に有用な樹木・生物多様性、⑤最後に炭窯のところで「地球温暖化と森林」としてまとめました。実際に森や樹木を見ながらの解説です。

茅編みクラフトは前日用意したスグリ茅を使い、茅編



生徒たちが作ったボッチ



茅編み

み機でミニすだれ(筆巻き)を作っていきます。此処の担当は岡田さんと藤岡さん。少し時間が足りなかったようで準備を含め大忙しの様子でした。

このほか、雲越家住宅(古民家)と諏訪神社を見学

して藤原の生活や文化にも触れてもらいました。

3日目は、水上高原ホテル200でまとめのアドバイスをしました。会場は11階にあり谷川岳などの奥利根の山々の眺望がよく利根川との位置関係もよくわかる絶好



水上高原ホテル200で林さんのダムの話

の場所でした。

林親男さん、藤岡さんにも手伝っていただき彼らFWで体験し学んだことをまとめる際の質問に答えアドバイスしました。ネットなどで調べた事前学習と実際のFWとの違いに戸惑っている子もいましたが、よくポイントをつかんでいたようです。

子供たちの体験や学習をお手伝いすることは彼らの成長に触れやりのがあります。例年よりもその美しさは劣るものの、大自然が織りなす紅葉の中でのこの体験を活かして生きる力を養ってほしいものです。

今年のプログラムにも改善する点もあります。それに生徒たちがフィールドの様々なものの中で何に興味を示めすかがわかりましたので彼らの後輩たちのために改良し続けたいと考えています。



事前学習でやったことが実感として

■ 第一回東京楽習会 鶴見 武道先生「千年の森をつくる生き方」 報告 稲 貴夫

本年度最初の東京楽習会を去る12月11日午前、渋谷区の氷川区民会館で開催しました。「えひめ千年の森をつくる会」の



会長をつとめる鶴見武道さんより「千年の森をつくる生き方」をテーマに、映像を交えた鶴見先生の森づくりの活動と共に、そのベースにある生き方について、15名の参加者を前にお話をいただきました。

鶴見さんは平成12年に22年間勤務した千葉県内の県立農業高校を退職し、愛媛大学農学部生物資源学科に教員として赴任しました。そして森林ボランティア団体「えひめ千年の森をつくる会」を立ち上げるとともに、東温市井内に連なる二千枚余の棚田の最上段



東温市井内の棚田・左上が鶴見さんの古民家

の古民家に家族で移り住み、恵子夫人とともに、植林や間伐、炭焼きや自然農法など、「千年の森をつくる」活動に地域の人々とともに取り組んでこられました。

鶴見さんが千葉にいた頃は、ちょうど日本経済がバブルからその崩壊へと進んでいった時代。千葉県内では土木建



子供たちによる枝打ち

設用の山砂採取のために山がいくつも消えてゆきました。そしてその跡には首都圏から膨大な量の残土や産業廃棄物が運び込まれ、大切な水源地が汚染されてゆきました。これは千葉県のみならず、経済発展の影で全国的に進行しました。

「豊かな暮らし」の一方山が消え、列島が廃棄物で埋まりある現実のなかで、私たちに何ができるなかを考える中で、循環型社会の実現に向けての森づくり―「千年の森をつくる生き方」へと鶴見さんを向かわせていったのです。



木炭学校

その活動と理念は、千葉県で昭和60年に「君津千年の森をつくる会」設立で産声をあげ、平成6年の伊勢市での「千年の森に集う」シンポジウムを経て、「えひめ千年の森をつくる会」へと続いています。

限られた誌面で活動内容を詳しく伝えることはできませんが、具体的には、○森づくり ○世界に開かれた木炭学校 自然農法実践農場 ○安全な食と農林産物の加工が学べる場 ○未来循環型自給をめざした生活の提案などを柱としています。

その目的とするところは青水と共通していますが、



最後に草野塾長が「えひめ千年の森をつくる会」との現地交流の希望を述べて本年度第一回の楽習会は終了しました。

■ 藤原現地報告

「困難な時代を生き抜く暮らしの知恵」 北山 郁人

昭和30年代ごろからの登山ブームの時代、山はゴミであふれていました。困った行政は、山頂にゴミ箱を設置しました。当然すぐにゴミ箱は一杯になり、山に穴を掘って埋めました。現在では考えられませんが、山に残っている古い看板には、「ゴミはちゃんと埋めましょう。」と書かれています。今でも山

頂付近の藪の中には、当時のゴミが層になって堆積しています。その後、自然保護運動とともに、

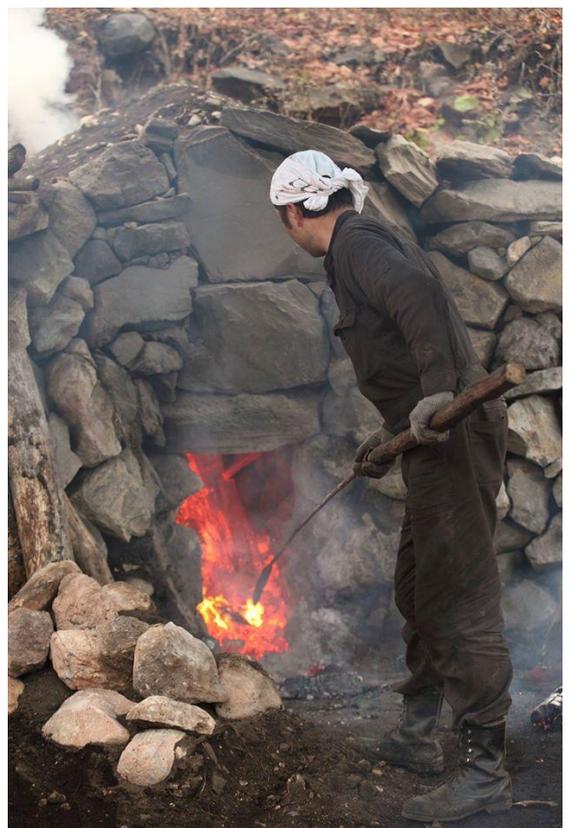


ゴミの持ち帰り運動が盛んとなり、今では、山の中に捨てられるゴミもほとんどなくなりました。しかし、ゴミはいくら家に持ち帰ってもゴミはゴミなのです。地球規模で環境が変化してしまっている現在、自然を守るためには、「いかにゴミを出さない暮らしをするのか。」ということが問われています。みなさんも薄々感じていると思いますが、近年の気候変動による異常気象など、人類が生き残っていくためにも、大きくライフスタイルを転換していかなければならない時代になってしまいました。地球が数十億年かけて作った石油をたった百数十年で使い切ってしまうというのは、小学生でもおかしいことが理解できます。

毎年冬の前に、薪が軒先いっぱいになり、石油王にでもなったような満足感と、これで石油がなくなっても生延びられるという安心感に満たされます。わざわざ地球の裏側の地中深くから石油をくみ上げ、莫大なエネルギーをかけて、群馬の山奥まで運んできて燃やさなくても、目の前にたくさんある木を燃料とすれば、お金をかけずに石油よりもはるかに上質な暖をとることができるのです。田舎の暮らしには、

お金では買うことのできない価値がたくさんあり、都会の人たちも少しずつ、それに気づき始めました。

私が、田舎で生活するよう



になったのは、ただ単に自然が好き、田舎が好きというだけではなく、このままでは、都市で生活していくことが難しくなると感じていたからです。私は、美術を通じて自然の見方、感じ方を学び、巨樹を調査することにより、地球環境の変化を知り、レンジャーとしてひたすら自然の中を歩き回り、その現状を体で感じ、経験してきました。しかし、この現状に絶望し、諦めているわけではありません。農山村には、これまで数千年にわたって積み上げられてきた自然と人との暮らしの知恵が蓄積されています。すべてのエネルギーを薪でまかなうことは不可能ですが、日本のすばらしいテクノロジーと先人の知恵を融合することにより、この困難な時代を生き抜くことが、必ずできると信じています。



空撮サービスも展開

また、茅風通信の読者の皆さまはご存知の通り、みなかみ町は温泉や豊かな自然を活用した観光産業が盛んであり、行政や観光協会、商工会等の連携による「戦略的な誘客施策」を展開しています。したがって、会社としてもそれらの期待に応えるべく、スピーディーで効果的な企画提案につとめています。

そして、印刷物と Web などの様々な電子メディアを活用するクロスメディア関連の事業をよりユニークな発想で展開してゆくことを目標にして、日々の業務に努めておられます。

青水との関わりは、代表をつとめる原澤さんが数年前、商工会の山田局長さんに誘われて上ノ原での茅刈りを見学した際に、当時の清水塾長（現顧問）と北山幹事（現塾頭）に出会い、青水の主旨に賛同いただいたことに始まります。以来、協賛団体として青水を支援下さっております。

実は原澤さんは会社経営のかたわら、週末は赤城山の南麓でモーターパラグライダーのインストラクターをつとめています。したがって同じく週末が主体の青水の活動には参加することがなかなか叶いません。しかし、ユネスコエコパーク登録を目指す

みなかみ町にとっても藤原地区は大切な場所であり、豊かな自然はみなかみ町だけでなく首都圏で暮らす人々の命をも支えていることから、青水の自然環境を生かした活動が、地域の活性化につながり、そしてこれからも継続して展開されてゆくことに、大きな期待を寄せていただいています。

私ども青水としても、様々な事情でフィールドに来られなくても、青水を応援して下さる方々が大勢いることを忘れずに、活動してゆきたいと思えます。

有限会社 東洋プロセス
 住所 〒379-1308
 群馬県利根郡みなかみ町
 真庭 781-3
 電話 0278-62-1414

■協賛団体紹介(第4回)「東洋プロセス」 稲 貴夫

森林塾青水の協賛会員として様々な形で活動にご協力いただいている企業や団体を紹介します。第4回目は、みなかみ町の東洋プロセスです。

地元みなかみ町真庭にある(有)東洋プロセス(代表取締役・原澤三智夫氏)は、平成四年の設立で、各種の印刷物をはじめ、屋内外のサインやディスプレイ、映像、ホームページ等広告関連の企画・制作を行っている会社です。従業員は5名で、主に群馬県北部の各JA、行政機関、商工会、観光協会、一般企業などの仕事を行っています。そのうち半分以上がJA関係の仕事ですが、これはJAグループ群馬が経営する企画会社である(株)JAプリテックの協力会社であることによります。ですから、最近の政府主導のJA改革の動向は非常に気になるということです。

東洋プロセス制作物の数々



■野守のつづやき(9)

—海外見聞録：やぶにらみ「愛蘭土紀行」—

ケルトの国・アイルランドへ 上ノ原のフローラに蝶や蜂が舞い来る盛夏。諏訪神社夏祭りの翌8月18日、かねて念願のアイルランドの旅に発った。以下は、1週間余の旅の見聞録の抜粋。まずは最初の2日間、北アイルランドの首都ベルファストからアイルランド共和国の西都ゴールウェーまでの印象から。

●緑／平坦／岩石／雨



あらかじめ聞いていた「エメラルグリーン」の国の例え通り、牧草地や麦畑が多く、なだらかな丘陵が広がる北海道に似た風景。因みに、面積は北海道とほぼ同じでイギリスの西方にある。

牧場の境界も家の周りもみんな石垣。石造りの住宅、教会・修道院、十字架、など何処を見ても石だらけ。でも、それが何故か安らぎ感を与えてくれるから不思議。

景観規制をしているのかと思わせるほど美しい家並みの集落。平屋又は二階建て以下で、部屋の数だけあるチムニー(煙突)と石垣に前庭の緑。石垣の多い佇まいは、五島列島の集落を彷彿とさせるものがあった。



道中、ひっきりなしにわか雨が来る。レインシャワーと呼ばれる、「狐の嫁入り」に降る雨のようなものなので、地元の人々は傘など持ち歩かない。大概は、ポンチョ(フード付き雨合羽)を羽織って、悠然と歩いたり自転車漕いだりしている。

● **ナショナルトラスト** アイルランド島の北端に位置するジャイアンツ・コースウエー。「巨人の石」と呼ばれる神話世界の巨石や全長8kmにわたって林立する柱状節理などからなる世界自然遺産。このあたり一帯は、ナショナルトラストによって保全管理されている。



イギリスで発達した方式と理解しているが、NPOやNGOの活動はどうなっているのだろうか？

● **ケルト独特の十字架** 十字に円環を組み合わせたケルト独特の十字架。円環は古代ドルイド教の名残で、生命の永遠性を信じたケルト人の思いが込められている。日本にも、輪廻転生といった共通の仏教思想がある。以前、鞍馬寺を訪ねた際に「羅網」という魂の不滅・輪廻転生を象徴する渦巻き文様の巨大掛軸を拝見したことを思い出していた。



● **茅葺資材は今や、輸入！** 観光スポットの何ヶ所かで、茅葺家屋に出会った。我が国で見ると立派な造りではなく、何となく弱々しく華奢な感じだった。国内産の屋根材は今や枯渇し、トルコ方面から輸入している由。我が国も、草地面積はわずか1割に激減。上ノ原の茅場保全の今日的意義を改めてかみしめた。



● **日本では帰化植物が「国の花」!** 帰化植物の代表格のアカツメクサは上ノ原の水汲み場あたりにも見られるが、アイルランドではシロツメクサやウマゴヤシなどマメ科の草花(クローバー)をシャムロックと総称、「国の花」として親しまれている。我が国では帰化植物だからと毛嫌いする向きもあるが、四つ葉に出会えば幸せにか、飼料としてはもとより蜂蜜源としても高評価を得るなど重宝な存在。そして、何といても日本最良のアイルランドの「国の花」。見直してやって欲しいもの。



来年は「幸せの国」ブータンへ、と希っている。さて、どんな守り人たちとの出会いがあるのか楽しみなこと。
平成28年 冬 (青)

～編集後記～

記念すべき第50号の発行を迎えることができました。いつも『茅風通信』を支えてくださる皆さまに、心より御礼申し上げます。今号は、ススキ草原での茅刈りや茅出し、ミズナラ林での木馬道再生など、上ノ原の話題が盛りだくさんです。本誌を通して上ノ原を訪れる多くの皆さまに、青水の活動についてご理解いただければ幸いです。

来るべき第100号を目指して(飛躍しすぎ?)、より親しみやすい編集を心掛けてゆきたいと思っております。読者の皆さまのご寄稿やご意見、お待ちしております。お問合せは事務局までお願いします。(稲)